

開設  
30周年

特集

# 松浦市地方卸売市場

# 松浦魚市場



松浦市地方卸売市場松浦魚市場（以下「松浦魚市場」という）は、昭和54年10月15日の開場以来、本年10月で30周年を迎えました。当初年間水揚目標6万トン体制でスタートした松浦魚市場ですが、現在では年間水揚量12万トン体制となり全国でも有数の生産地市場として認知されるほどの魚市場へと成長しました。

今月号では、この市場のこれまでの歩みや今後の展望などを紹介します。

## 松浦魚市場の仕組み

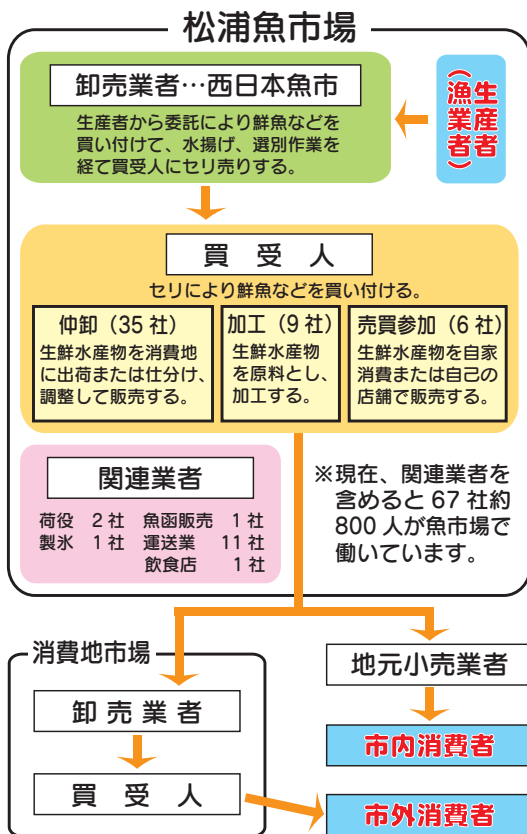
松浦魚市場は、松浦市が開設者となり、昭和54年10月に開場しました。松浦魚市場では、生産者から水産物を集荷し、セリによって販売する「卸売業者」の西日本魚市と、セリに参加する買受人によって取引業務が行われています。また、これらの業者のほか、セリ後の水産物を集荷先に立替たり荷をトラックに積み込むなどの作業を行う荷役業、消費地市場などへ運送する運送業、魚函販売業、製氷といった関連業者、工場などが入っています。開設者の市は、これらの卸売業者や関連業者からの、市場施設使用料を収入として、魚市場の運営を行っています。

松浦魚市場は「生産地市場」と呼ばれている市場で、取り引きされた魚の流通形態は大きく分けて「鮮魚向け」「冷凍加工向け」「餌料向け」の3種類に分類されます。

セリ販売によって買い受けられた「鮮魚向け」は、地元の小売業者へ卸されるものもありますが、そのほとんどが福岡や近畿、関東などの「消費地市場」へと送られ、そこで再びセリ販売にかけられ、小売業者を通して消費者のもとへ届けられています。

また、「冷凍加工向け」は、主に「アジの開き」などの加工原料として利用されるもので、セリ販売の後、凍結され、主に中部地方などの加工産地へ輸送され、そこで加工されています。「餌料向け」は、多くが地元の養殖漁業者へ流通しています。

## 流通の仕組み



# 松浦魚市場30年の歩み

## ●開場へ

当時、生産者のための魚市場開場を目指していた日本遠洋旋網漁業協同組合（金子岩三組合長・当時）から昭和52年8月、東シナ海などの主漁場と消費地の間にあるという好条件を備えた本市の調川港に魚市場を開設したいとの要請がありました。

要請を受けた市は、地域経済浮揚の起爆剤になるということで魚市場建設に着手。市、市議会、松浦・新星鹿両漁業協同組合をはじめとする漁業関係者、地域住民、日本遠洋旋網漁業協同組合の間で検討、協議が行われました。

その結果、昭和53年に松浦漁協、新星鹿漁協の総会で、公有水面埋立同意が可決され、魚市場建設は大きく前進しました。



さらに、昭和53年12月の定例市議会では、卸売場（A棟・B棟）建設のための工事予算を議決。翌年54年6月には、日本遠洋旋網漁業協同組合が、卸売業者として西日本魚市株式会社を設立するなど、開設に向けて準備は着々と進んでいきました。8月25日には、魚市場第1期工事（卸売場A棟・B棟）が完成。9月17日には県から市場開設許可を得て、昭和54年10月15日に松浦魚市場は開場しました。

## ●発展

多くの人の努力と協力により、『公設民営』の松浦魚市場は開場しました。開場当時の市場は、2つの卸売場（A棟・B棟）、事務室、汚水処理施設といった最小限の施設で業務をスタートしました。

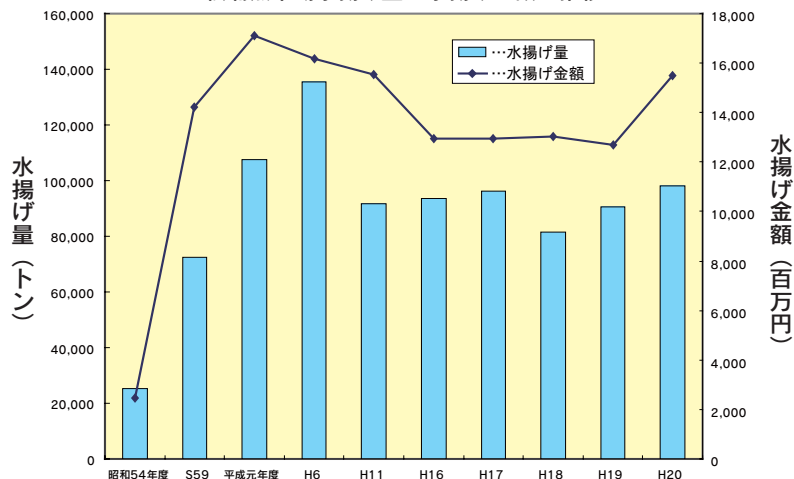
開業にあたり西日本魚市は、市場運営などの指導を受けるため福岡魚市場に人材派遣を要請。市場で働く従業員は、荷役、選別、セリの実地指導を受けながら業務をこなしていく日々が続きました。

こうした市場関係者の努力と大型旋網船団や小型旋網船団からの出荷協力もあり、水揚げ量は順調に増加し、昭和56年度には当初目標の6万トンを大きく上回る7万2千トンの水揚げを達成。昭和62年度には初めて年間水揚げ量10万トンの大台を突破しました。

特に、主力となるアジ・サバなどの青物魚については、それぞれの水揚げ量が日本一という実績を達成するなど、松浦魚市場は日本有数の生産地市場として認知されるほどに成長しました。

また、この間、松浦魚市場では昭和62年までに3回の工事（第2期、第4期工事）を行い、卸売場と汚水処理施設の拡張・増設、水揚岸壁の延長

松浦魚市場水揚げ量・水揚げ金額の推移



などを行い、水揚げ12万ト体制が確立しました。これに伴い、冷凍・冷蔵工場や加工場も相次いで進出。平成16年には、隣接する水産加工団地が完成し、平成19年には松浦魚市場に2基の大型浮桟橋が完成しました。市場内の業者も800人を越えるなど、松浦市の経済を支える総合水産基地へと大きく発展しました。